

酒もたばこのまないし、お茶もあまり飲まないのので、お茶を持って来てほしいとか、火を持って来てほしいとか、そのほか何にも女中さんたちにいわないので、私は旅館に泊まっていなくても、いるか、いないかわからないくらいですが、初めて旅館の人にものを言い、会ったのです。長男の方は山崎英生さんという人でした。「どんなことをするのでですか」と尋ねられたので、「実は英語の単語を清書してほしいのです。誰か適当な人はいないでしょうか」と言ったのです。そうするとその英生さんが、「そんなことでしたら自分たち兄弟四人いるので、自分たちが手伝つてあげます」といわれたのです。兄弟四人はこの英生さんの次が武夫さん、その次が実さん、その次が清之さんという人たちでした。そうしてその晩から三番目の実さんに手伝つてもらえるようになったのです。

私はこういうことを手伝つてほしいと頼んだついでに、速記の話をしたのです。実さんはかつて速記を勉強しようと思ったことがあったそうですから、私あてに来る手紙を見て速記だなあとわかっていたそうです。その翌朝です。実さんが私の室に来て「昨晩は速記の話を聞き、すっかり興奮して眠れませんでした。こういう歌を作りました」といって短歌を見せてくれたのです。私はびっくりして非常に感心したのです。実さんは旧制日高中学校を卒業した後、旅館の板前さんがいないようになったので親孝行な実さんは自分が代つてその仕事をしていたのでした。旅館のことですからいつも夜遅くでないと仕事が終わらないので、英語の単語を清書するのは十一時、十二時ごろになってから始め、夜中の一時、二時までかかっ